

今回の授業や配布されたプリント内で、最近の大学生は「画一的で通り一辺倒の考え方しかできない」、復興を考える学生や役人たちは「現場を全くわかっていない」と言われていた。

農業とは多様な分野の知識や様々な人間たちの集合から成るものであるため、画一的で範囲の狭い知識だけでは解決策に繋がりにくい。また、配布資料中で挙げられていたように、農作物のセシウム吸収量測定実験の終了直前になってサルに農作物を襲われる、といったような厳しいことも現実では起こりうるため、現場に出ずに机上だけで理論を構築することもまた解決への道になり得ないのかもしれない。

しかしその一方で、現在は以前よりも研究や制度が高度化・複雑化していて、ある分野でのブレークスルーを生み出すのが困難になってきているというのもまた事実であるだろう。このことは全く現場に出ないことを正当化するものではないが、考慮には入れないといけない。

そこで、私から以下のことを提言したい。すべての人に現地で実際に行動させたり、様々な分野のことを習得するように促すのではなく、現在進行している多数の研究や議論をまとめる人材や、まとめられたことを現地で実行に移し検証する人材こそがこれからの復興において必要とされるのではないだろうか、と。

これまで言われてきたような画一性や現場を無視しているといった問題点は、いずれも提案から研究、議論、現地での実践までをすべて、あるいはその大部分を一人でやるということが言外に前提としてあったように感じる。実際、これまでの社会では分業は時間や労力の面でロスが大きかったため、このような考えが定着したのだとも考えられる。しかし、ICTの普及によって問題解決の高度化が進んできたこと、それと同時に情報の共有や遠隔地との連携が容易になってきているということから、現在は問題解決方法もまた見直すべきなのではないだろうか、と思ったのである。

以上の提言を、私が今震災地のためにできる行動としてこの課題への答えとしたい。